

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：42621

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530689

研究課題名(和文) 文化的スクリプトの獲得プロセスに関する研究：日中米の昔話とその伝達方法の比較

研究課題名(英文) How people acquire cultural scripts through folktales: East-West Comparison

研究代表者

向田 久美子 (Mukaiida, Kumiko)

駒沢女子短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：70310448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：日本の昔話19話とグリム童話21話をポピュラリティを示す指標に基づいて選出し、独自のコーディング・スキーマにより内容分析を行った。その結果、1)日本の昔話はグリム童話よりもハッピーエンドが少なく、あいまいなエンディングが多い、2)日本の昔話は結婚によるハッピーエンドが少ない、3)グリム童話は、日本の昔話よりも登場人物が能動的に行動する、4)日本の昔話とグリム童話には、共通するスクリプトとともに、独自のスクリプト・パターンが存在する、5)日本の昔話は話が短い傾向にある、ことが示された。これらの特徴は、日米の大学生の語りの特徴とも共通しており、昔話が語りの源泉として機能していることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study explored cultural scripts of major Japanese and European folktales. Based on popularity indices, 19 Japanese folktales and 21 Grimm's folktales were selected and a coding scheme covering their contents was created. Content analysis revealed the following results: 1) Compared to Grimm's folktales, Japanese folktales have fewer happy endings and more ambiguous endings, 2) Japanese happy endings are not necessarily accompanied by marriage, 3) The characters of Japanese folktales tend to be less active than their counterparts in Grimm's folktales, 4) There was a common script pattern as well as a unique script pattern in each culture, 5) Japanese folktales tend to be shorter than Grimm's folktales. These culture-specific features of folktales were found to correspond to those of Japanese and American undergraduates' narratives. This finding suggests that folktales could function as a source of personal narratives.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：文化 スクリプト 昔話 内容分析 語り 読み聞かせ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、過去5年余りに渡って、文化と行動を媒介する概念として「スクリプト」を取り上げ、それらが文化圏によって異なっていることを実証してきた(向田, 2009; Mukaida, Crane, & Azuma, 2009 ほか)。スクリプトはイベント・スキーマとも言われ、「人の行為が状況にどのようなはたらき、どのような経過をたどり、どのような結末に至るかについての常識的な期待」(東, 2004)と定義される。これらのスクリプトが、人の行為や出来事を理解、推測、評価する際に認知的枠組みとして働き、結果的に行動レベルでの文化差を生むと考えられる。

向田(2009; Mukaida et al., 2009)では、過去に努力したことや将来の一日に関する語りの3文化圏2世代(日中米の大学生と成人)比較を行った。その結果、日本では具体性と主体性に欠け、行動や結果よりも状況や内面を短く綴る「川の流れ」パターンが、中国では具体的な方略を明示し、苦楽を伴いながら上昇をめざす「山道」パターンが、アメリカでは否定要素が少なく、肯定的な結末を楽観的に語る「ハッピーエンド」パターンが優勢であることが見出された。また、これらのスクリプト・パターンは青年期の語りにおいてより強く見られることも示された。

以上の研究成果は、行為の解釈や評価における文化差を外在的な文化(個人主義文化圏と集団主義文化圏など)に直接帰属させるのではなく、文化を反映したスクリプトが個人の中に取り込まれ、それが作用した結果としてみなすことを可能にする。すなわち、文化が直接行動の差を生むのではなく、文化的資源や実践が個人の認知過程に内化され、結果的に個人の行動に影響するという「文化と心の相互構成過程」(北山, 1998)の一端を示すものと言える。

しかしながら、向田(2009; Mukaida et al., 2009)では、スクリプトの文化的差異とそれ

が行動に及ぼす影響を示すことにはある程度成功しているものの、スクリプトが個人に内化されるプロセスについては、十分に検討できていない。

文化的スクリプトの獲得に關与する要因のうち、具体的な資源として考えられるのは、絵本や教科書、小説やドラマといった種々の文化的テキストであり、具体的な実践としては、親子間のコミュニケーションや学校教育、テレビや映画などのメディア利用が挙げられる。これらすべてについて同時に検討することは難しいため、本研究では「昔話」とその伝達(読み聞かせ)の実践を取り上げることとした。昔話を取り上げたのは、1)子ども時代に聞く物語の影響が示されていること(Nelson, 1981; McClelland, 1981; Tsai et al., 2007)、2)一時的な流行物と比べて、時代を経て語り継がれてきた内容には文化的特徴が色濃く反映されていること(Sperber, 1996)、3)同じ文化圏に属する多くの人を知っており、文化的共有度が高いと考えられること、による。

2. 研究の目的

先行研究(向田, 2009; Mukaida et al., 2009)との比較を可能にするため、日本と中国、アメリカの3文化圏を取り上げ、各文化圏において語り継がれている代表的な昔話の内容分析を行い、文化圏間に共通するスクリプトとともに、文化圏固有のスクリプトを抽出する。そして、それらが先行研究で見出された語りのスクリプトと共通しているかどうかを調べる。次に、各文化圏における昔話の子どもへの伝え方(読み聞かせ)の特徴を分析し、スクリプトが内化されるプロセスを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 昔話の内容分析

各文化圏における代表的な昔話を選定するために、北米圏では Norenzayan, Atran,

Faulkner & Schaller (2006) が認知度の高い昔話として選出した 21 のグリム童話を用いた。日本では、大学生 (N=324) への質問紙調査 (向田, 2013) とウェブサイト数の調査 (向田, 2014) を実施し、代表的な 19 作品を選出した。中国では同様の検討が難しかったことから、漢民族の代表的な昔話とされるもののうち、日本で入手可能な 18 作品について取り上げた (日本の 2 作品を除き、残り 56 作品については、こぐま社から出版されているテキストを使用した)。

昔話の内容分析を行うために、登場人物、人物描写、感情、結末の 4 つの領域にわたる通文化的なコーディング・スキーマを開発した。

独立した 2 名のコーダーによる内容分析に基づき、文化固有のスク립ト・パターンと普遍的なスク립ト・パターン双方の抽出を試みた。また、ページ数を比較することにより、物語の分量についても分析した。

抽出されたパターンが、個人の語りとの共通性をもつかどうかを検討した。

(2) 保育現場での読み聞かせ

保育者が日頃どのような本を選び、どのような意図をもって読み聞かせを行っているのかについて、日本人保育者 13 名、アメリカ人保育者 5 名にインタビューを行った。

4. 研究成果

(1) 昔話の内容分析

選出された日本の昔話 19 作品とグリム童話 21 作品の内容を網羅するコーディング・スキーマを開発した。中国の昔話 (18 作品) については代表性に問題があったため、予備的な分析にとどめ、今回は日欧の比較を中心に行った。

日本の昔話とグリム童話の内容分析を行った結果、以下のことが示された。日本の昔話はグリム童話よりもハッピーエンドが少なく (63.2% < 95.2%)、あいまいなエンデ

ィングが多い (21.1% > 0.0%)。日本の昔話は結婚によるハッピーエンドが非常に少ない (8.3% < 70.0%)。グリム童話では、日本の昔話よりも登場人物が能動的に行動する (61.9% > 21.1%)。日本の昔話とグリム童話には、共通するスク립ト (主人公が“よい性格”もしくは“よい行い”によって“報酬獲得”をする一方、“悪い行い”をした登場人物が“罰”を受けるという「勸善懲悪」パターン) とともに、固有のスク립トも存在することが示された。具体的には、グリム童話では、“よい外見”の女性 (もしくは“王子”) が“試練・課題”に出会い、敵役の“悪い行い”に出会うものの、“約束履行・課題達成”を果たし、“王子” (もしくは“よい外見”の女性) と“結婚”するという「劇的ハッピーエンド」パターンが 42.9%、日本では“老年男性”が“よい行い”もしくは“よい性格”によって“報酬獲得”に至るという「穏やかハッピーエンド」パターンが 42.1%、“若年男性”が“よい行い”によって“よい外見”の女性に出会い“報酬獲得”するも、“掟破り”をして“喪失”に至るという「サッドエンド」パターンが 15.8% 見られた。最後に、日本の昔話は、グリム童話に比べ、全体的に話が短いことも示された ($p < .01$)。

上記の 5 つの特徴 (特に 、 、) は、日米の大学生の語りの特徴 (Mukaida et al., 2009) とも共通しており、昔話が個人の語りの源泉の一つとして機能している可能性が示唆された。

中国の昔話についても、同じコーディング・スキーマを用いて分析したところ、日本と同様、結婚によるハッピーエンドは少なくなっていた。一方で、主人公の知恵や聡明さが強調される傾向にあり、日本の物語よりも主人公の主体性を感じさせる内容であることが示された。

(2) 保育現場での読み聞かせ

保育者が日頃どのような意図をもって、どのような内容の本の読み聞かせを行っているのか、日米の保育者 18 名にインタビューを行った。まだデータ収集中であり、分析も途上であるが、以下のことが示唆された。

いずれの文化圏でも、発達段階によって読む内容やねらいを変える、知的発達とともに、想像力や創造性の発達、社会的・情緒的発達を重視している。これらに加え、日本では読み聞かせ（絵本）を集団活動（遊びや制作）に展開させようとする保育者側の意図があることが伺えた。今回は実施できなかったが、今後は中国での保育者へのインタビューの実施、各文化圏における代表的な昔話の読み聞かせ実験、その記録分析なども行っていきたいと考える。

本研究の成果を総合すると、日欧で語り継がれている昔話には、共通するスクリプト・パターンとともに、文化固有のスクリプト・パターンが存在すること、それらの特徴は現代の日米の大学生の語りとも共通していることが示唆されたと言える。具体的には、日本では主人公（語り手）の主体的な行動よりも、日頃の心がけのよさや運命のはかなさに重点を置いた、短くあいまいな「川の流れ」的スクリプトが、欧米では、主人公（語り手）の主体的行動による困難の克服と、結婚による地位の上昇を描く「ハッピーエンド」的スクリプトが優勢となっていた。子どもへの読み聞かせの効果については、まだ十分な知見を得るには至っていないものの、本研究から、文化的資源（昔話）が個人のスクリプトの源泉の一つとして機能していることが示唆されたと言えるだろう。

しかしながら、スクリプトの共通性を指摘しただけでは、それが内化されるプロセスを明らかにしたことはない。今後は、読み聞かせの実践に加え、発達段階ごとに見た子どもの発言や作文分析などを通して、スクリプトが内化されるプロセスを明らかにし

ていく必要があると思われる。

5 . 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計 3 件)

向田久美子 (2012) 日欧の昔話の認知度 (1)
短期大学生の学年別検討 駒沢女子短期
大学紀要第 46 号, pp.39~47 (査読なし)

向田久美子 (2013) 日欧の昔話の認知度 (2)
専攻別の検討 駒沢女子短期大学紀要第
47 号, pp.33~40 (査読なし)

向田久美子 (2014) ウェブサイト数から見た
日本の昔話のポピュラリティ 駒沢女子
短期大学紀要第 48 号, pp.33~36 (査読な
し)

〔学会発表〕(計 9 件)

向田久美子 (2010) 日本の昔話に見る文化的
スクリプト (1) 主人公の agency をめぐる
予備的検討 日本保育学会第 63 回大会論
文集, p.550 (査読なし)

Kumiko Mukaida (2010) Cultural scripts in
individual narratives and traditional
folktales. XXth Congress of the
International Association for Cross-Cultural
Psychology, Melbourne, Australia, Abstract
Book, p.133 (査読付)

向田久美子 (2011) 日本の昔話に見る文化的
スクリプト (2) 西洋の昔話との比較から
日本発達心理学会第 22 回大会論文集,
p.618 (査読なし)

Kumiko Mukaida (2011) How happiness is
depicted in European and Japanese
folktales. 14th European Congress of
Psychology, Istanbul, Turkey, Abstract
Book, p.407 (査読付)

Kumiko Mukaida (2011) Cultural scripts in
individual narratives about past efforts.
International Association for Cross-Cultural
Psychology Regional Conference, Istanbul,
Turkey, Abstract Book, p.113 (査読付)

向田久美子 (2012) 日本とヨーロッパの昔話
に見る幸福観 日本発達心理学会第 23 回

大会論文集, p.240 (査読なし)

向田久美子 (2013) 昔話が伝えるライフ・スク립ト - 日本・中国・ヨーロッパの比較から 日本心理学会第 77 回大会論文集, p.88 (査読付)

向田久美子 (2014) 保育者にとっての読み聞かせの意義(1)インタビュー調査から 日本発達心理学会第 25 回大会論文集, p.731 (査読なし)

向田久美子 (2014) 保育者にとっての読み聞かせの意義(2)比較文化に向けた仮説生成の試み 日本保育学会第 67 回大会論文集, p.797 (査読なし)

[図書](計 0 件)

[産業財産権]
出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

[その他]
ホームページ等・・・なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

向田 久美子 (MUKAIDA, Kumiko)
駒沢女子短期大学・保育科・准教授
研究者番号：70310448